せたかむい
古平町役場総務課
☎42-2181（代表）
平成19年5月1日

年表で読む古平の歴史

［117］

商工業 ⑤

商業

◆ **煙草販売の推移**

当時は古平郡内にもかなりのアイヌ人がいたと思われるが、アイヌの嗜好品に酒のほかに煙草があり、これらは漁場も経営していた運上屋から与えられていた。

嘉永四年（一八五一）、古平場所を請け負っていた岡田家の『商用目録』に、

一、男蝦夷（アイヌ）が仕事の切り揚げの時には、上酒二盃、濁酒二盃、樋一本、莨（煙草）二把、間切（まきり＝小刀）二枚宛遣わす

一、秋のオムシャ、乙名、小使役の蝦夷二三人に上様より下される。一人に付き清酒小樽一つ、莨二把ずつ

とあり、煙草は特別な役職の者に与えられていて、貴重品の扱いであった。

また、この目録の「蝦夷交易値段」には、

地廻り煙草一玉――鰊一束

とあり、現地で製造された（地廻り）煙草一玉と、鰊一束が交換の比率であった。煙草の好きなアイヌ人は、イタドリの葉やブドウの葉などを乾燥し、細かく刻んでタバコの代用にしていた。第二次世界大戦中から戦後にかけての日本の国内事情とよく似ている。

煙草は浜中町の中村源治郎が徳島県から仕入れ、煙草を詰めた和紙の袋に「千代桜」・「大漁」などと木版を押して行商をしていた。

明治八年煙草税が制定され、明治二一年勅令をもって煙草税則が施行された。この年、すでに店舗を開いていた中村源治郎は、小間物類の卸し小売業のほか煙草の卸し小売業も始めた。

明治一三年煙草売捌き営業者

港町　今井小三郎　川口藤七
　　蠣崎紋蔵　仲谷善吉
浜町　長谷川修治郎
　　中村源治郎　岩本義和
　　岡本豊治郎　広谷利助
　　大槻市三郎　寺田讃治郎
　　川岸幸右衛門
新地町　伊藤忠吉　斉藤半五郎
　　山口佐多　源野又治郎
入船町　高田吉郎兵衛
　　西岡久治郎
沖村　工藤治右衛門
　　志摩駒吉　若狭多兵衛
沢江村　藤田三之丞

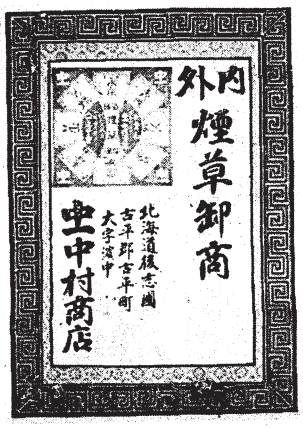
この外にもいたと考えられるが現在のところ不詳。

明治三一年（一八九八）、「葉煙草専売法」が施行された。

第一条　政府は葉煙草の専売権を有す

とあり、煙草専売法実施の準備をし、明治三三年に「未成年者禁煙法」が施行された。

明治三七年「煙草専売法」が施行され、煙草小売人は大蔵大臣の指定を受けなれば販売できなくなった。煙草の専売は日露戦争の膨大な戦費を調達することが大きな目的であった。



← 最初に古平で煙草の販売を始めた中一中村商店の広告

※ 酒二盃（はい）＝一盃というのは現在のさかずき（盃）ではなく、茶碗で一・五合ほどの量ではないかと言われている。アイヌの人達は酒が大の好

物だったというが、上酒（清酒か）と濁酒合わせて四盃、六合（約一リットル）程度の酒で、日頃の厳しい労働の憂さ（ウサ）をはらしていたのでしょうか。

オムシャ＝アイヌの撫育策の一つで、撫育（ぶいく）といえば「慈しみ育てる・世話をする」というような意味だが、ここでは「手なずける」という意味合いが強い。初めは交易をするに当っての交歓儀礼であったが、後には交易や漁労が終って慰労のためや、アイヌの人たちを支配するための手段として、主従の関係を強める年中行事のようになってしまった。

乙名（おとな）＝役付きの一位が場所全体をまとめる惣乙名、これを補佐するのが脇乙名、乙名は場所内のコタン（部落）の長である。和人によく従う者が必要とされ、和人が与えた名称である

小使（こづかい）＝乙名に次ぐ役職であった

◆後志国状況報文

明治三二年、河野常吉の報告文に、古平郡の商業の状況について次ぎのように述べている。

沖村

酒菓子類の小売商一戸あり、村民の日用品は古平市街に仰ぐ

沢江村

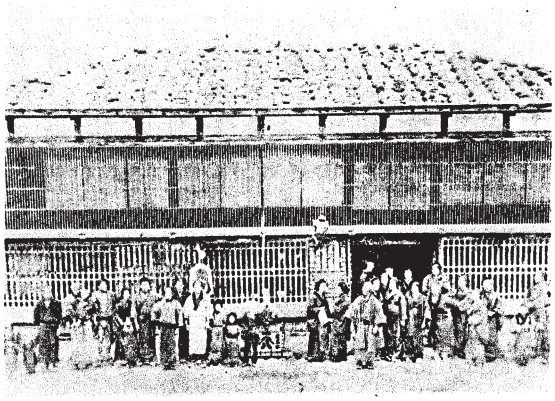
酒菓子煙草類の小売商四、五戸あり、村民の日用品は古平市街に至りて購求す

群来村

酒菓子類の需要品は古平市街に仰ぐ、村内には小売商が一戸あるのみ。

古平市街（浜町・港町・新地町・入舟町・丸山町）

開拓時代は商店を開く者があったが、多くは入港の和船より貨物を受けてこれを委託販売するに止まり、呉服、反物、小物類は専ら行商による。明治一〇年以降、呉服、荒物、小間物や雑貨商が相次いで開店し、商業やや繁盛す。今は主なる商品は小樽や府県より仕入れ、これを美国、積丹の各商店や行商に卸し、小売としては郡内の各町村、余市郡沖村の一部に供給している。積丹半島で商業の最も盛んな地である。物価は小樽に比較して一割から一割五分高く、ことに荒物類は二割以上の高値にして、やや高すぎる感がある。海産物は入港の加賀、越中の和船に直接売り込み、また小樽商人の手を経て、古平港から直接四日市、大阪などに輸出する。商人の中には一万円以上の資本を運転する者五、六戸ある。（以下 表など省略）



← 新地町で旅篭（宿屋）と料理屋を経営していた八蔓目店（明治一〇年代と思われる）

◆明治の大売出し

明治三五年頃になると、浜町の中通り（現在の一条通り）、新開町（二条通り）、新地町、港町一帯に商店街ができた。この頃から商店では正月とお盆の時期に大売出しを行ない、正月には福引きのほかに福袋を売り出す商店もあった。福袋は特に人気があり、午前三時頃から売り出して、夜の明ける頃には売り切れてしまうという状態であった。

福引きにも興味を呼ぶような趣向をこらしたものもあった。

江戸の花―火事＝マッチ
花は桜木―人は武士＝かつおぶし
乙女の姿―しばしとどめん＝火箸
紀伊国屋―文左衛門　＝　かん
犬の鳴き声―ワンワン　＝　二つ

← 同じ頃の新地町の街並み

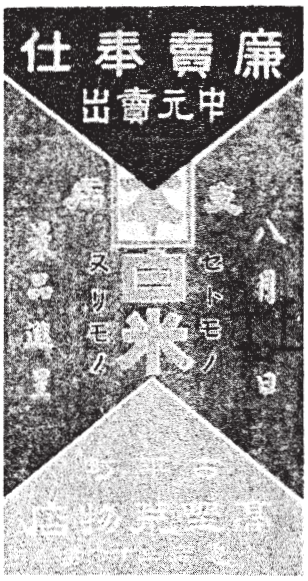
商工業者・外の移住と開業（年代順）

天保元年（一八三〇）	漁業・運送業	沢江村	仲谷勇治郎	
慶応年代移住	開拓使官吏	浜町	関口利勝	
明治　二年移住	米穀・回船問屋	港町	幾井舊七	
同　四年移住	魚網・回船問屋	港町	小町泰治郎	
同　五年移住	呉服商	浜町	高野常吉	
同	金物商	浜町	中村栄太郎	
同　六年	琴平神社宮司	新地町	竹内真弥	
同　七年移住	米穀・海産商	新地町	今井平五郎	
同	米穀・荒物　商	浜町	高野平治	
同　一〇年移住	呉服商	浜町	梅野富蔵	
同　一五年	正隆寺住職	浜町	大石養淳	
同　一六年	魚網商	入船町	渡辺宗作	
同	鮮魚商	入船町	鶴田正壽	
同　一七年移住	宝海寺住職	港町	西舘純一	
同　一九年	煙草商	浜町	中村源次郎	
同　二〇年	醤油醸造業	浜町	寿原要太郎	
同　二一年	呉服・米穀商	浜町	高野常吉	
同　二五年	米穀雑貨商	新地町	藤澤勇蔵	
同　二六年移住	荒物・海産商	新地町	山崎清治	
同　二九年移住	漁　業	入船町	斉藤兼太郎	
同	呉服商	港町	山口金治	
同　二〇年代	漁　業	沖村	米田惣太郎	
同　三〇年代	写真業	新地町	品田喜一郎	
同	旅館業	港町	津田清兵衛	
同	小間物雑貨商	新地町	泉　勇吉	
同　四三年移住	禅源寺住職	浜町	秋田岳轉	
同	医　院	浜町	河本　久	

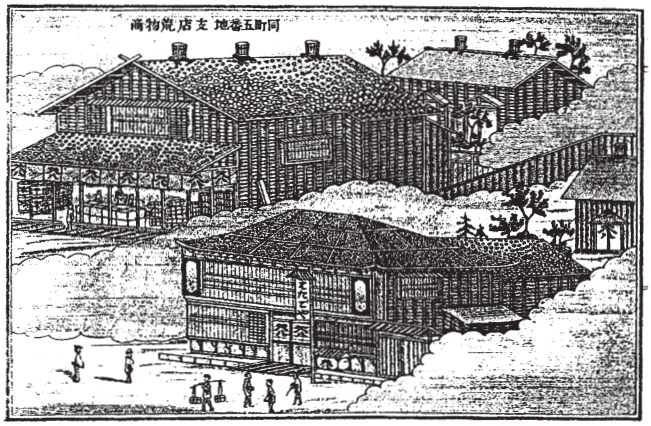
◆商工業者の開店

当時出版された『小樽区外七郡案内』『北海道立志編』『北海道人名辞書』などによると、古平町内で開業した年が次ぎのように記されている。（上図・開業年順）

← 大売出し最中の高野呉服店（高野常吉）の店内



← 中元大売出しの広告　本高野平治商店



↑『後志盛業図録』に載っている墓目八三旅人宿

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
〈124〉

大正十五年

▼一月一日

三時半に起床、洗面後すぐに神仏に参詣する。西宮神社から禅源寺へ、和尚は大般若の読経が終る頃であった。三時から読経していたとのこと。のち恒例の観音経をあげ終ったのは五時であった。まだ夜も明けぬ。終って和尚の部屋でよもやま話、茶菓、酒肴を頂いて六時半に帰る。郷社に参詣し、のち成田山へ参詣、ゴマ焚きをしているところであった。高台から港内遥かに対岸まで見える。帰り「正」、「用」、「伞」、「命」、「司」に寄り、弁天山に詣でて帰り、八時半朝食をとる。賀状、新聞を見て、九時半からの学校の拝賀式に参列する。一〇時半から裁縫室で交礼会があり六〇余名が集まる。「困」、「カ」、「太」、「ソ」、「中」などに寄り一時帰る。

▼一月二日

正月初売り当日、六時半に開店する。ようやく夜が明けかける。四、五年前までは夜中の一時、二時頃から板戸を叩いて大勢の人が来たが、昨年あたりから余り朝早い人はなくなったので店のほうも楽だ。八時頃から客が来る。夕方まで切れ間なく客があり六二〇円ほど売った。昨年より上成績だ。

▼一月三日

一一時から禅源寺で大般若の祈祷があるので詣でる。大勢のお参りだ。読経が終って今年の運勢のおみくじの発表がある。大吹雪も九時頃から静かになった。

▼一月五日

カレ網は皆出漁した。カレの値段年末よりさらに高く、一枡（マス）二五円もするとのことで出られれば申し分ない。「平」に新年の祝いに招かれて行く。

▼一月七日

幸治が小樽に帰る日だが、大時化で船は出ないというので陸行することにした。幸い港町の小林さんでも学生が行くというので、同道することにした。風は強いが雪は降ってない。熊さんが島泊まで送ることになった。一〇時出発、五時半頃小樽から着いたという電話がある。余市には四時頃着いたという。

▼一月九日

珍しい暖気で静かな日和だ。船で学生たちも大分帰ったようだ。カレの値段は続いてよく、一ナギで二〇〇円以上も水揚げするところもあるという。

▼一月一〇日

カレ網大漁で値段よく、漁師は景気がいい。カレ網三千間ほども出た。

▼一月一四日

昼前から雨が降り出し、道路がザブザブになる。七時過ぎ停電になる。夜、昨日佐渡から送って来たキジ肉を食べた。

▼一月一五日

祝聖会の例会日、五時半に家を出る。六時から読経、七時に終る。和尚の部屋で話をし八時に帰る。

▼一月一七日

店は刺網関係の客が多くなり忙しくなった。今夜、丸山観音のお参りがあるので四時に行く。

▼一月二〇日

梅野さん宅で部落会の新年会がある。部落会費、その他についていろいろ相談する。

▼一月二一日

吹雪きで板戸を閉めているが、隙間から雪が吹き込んでくる。吹雪も少しおさまり、五時から今年初めての寒修行に出る。寺から浜町、沢江方面を回り、七時半ころ寺に戻った。

▼一月二二日

寒修行に出る。新地方面へ出かけたが吹雪きでひどかった。七時半頃終り、途中一、二軒寄って八時過ぎ帰る。

▼一月二四日

吹雪きが続いて一尺以上も雪が積もっている。正午から実業同

志会の発会式が学校である。運動場に約三五〇名ほど集まっている。一時から始まり、会長、評議員の選挙、酒肴が出て四時半帰る。

▼一月二八日

正午から学校で鉄道期成会総会があり、百余名が集まる。鉄道の外に漁港の運動もすることとし、鉄道漁港期成会と改称、役員の選挙を行ない五時散会す。古平もこの分では年々人口が減少するので、鉄道と漁港は急務中の急務である。大いに運動すべきだ。

▼一月三一日

今日もまた吹雪きで、ずいぶんと荒れる日が続いた。町中どこも雪山ができる珍しい大雪になった。

▼二月一日

祝聖会例会、五時半に行く。寺の大きな炉に焚き木を入れ暖をとる。六時から読経が始まったが寒さが厳しい。指先が痛くなった。カレの値段も一月中頃までは一枡二七、八円していたものが、この頃は一枡六円から九円くらいに下落、正月以来の時化で出漁した日も少なく、カレ網連中は元気がない。鰊刺網の準備期に入り刺網が出る。夜、㊥でレコードの新しいのが入ったというので、子供らが聞きに行く。

▼二月四日

去年は鰊も大漁で、浜町方面では網を流してところもあって、店は昼食をとる暇もないほど忙しい。夜、㊥に行くと町長も来ていて、鉄道、漁港問題で大澤さんと上京するとのこと。首尾よくいってくれればよいことを祈る。

▼二月六日

吉井、寺田、坂田では、今年からスケソ網を本格的に始めるため目下準備中。二月二〇日頃から三月末までやり、その後、買い鰊などをやり、五月末からイワシ網にかかるとのこと。古平の漁民も鰊漁だけに頼らず新規の漁業に関心を持ってきた。実に喜ぶべきことである。我々もまた漁具の販路を開拓せねばならぬ。▼

二月七日

朝から太陽が輝き、青空が広がっている。春らしい天気で上ナギ、カレ網も出たし、磯まわりも出ている。

▼二月八日

久し振りで小樽行き、九時富丸が出帆、一〇時半余市に着く。手荷物は馬車に預け、商用で㊥に寄る。余市は年々発展していく。

▼二月一四日

スケソ漁も二〇日頃から漁期ということで、刺網千間ほども出る。カレ網と兼業する人もいる。今年の漁が好調なら来年から盛んになるだろう。一時から祝聖会の講演会があり、会員で修証義をあげ、のち説教あり八時半帰る。

▼二月一五日

祝聖会例会、五時半に出かける、五人が集まった。読経の後、和尚の部屋で話しをする。かねてから宿題であった祝聖会の事業のことで話し合う。桐畑一反歩ほど経営することは、原田さんが貸してくれるとのこと。今春植え付けをすることにした。信用組合組織を有限責任にすることについては、来る七月の総代会まで保留することにしたという。スケソ漁漁具がポツポツ売れる。古平の漁師も新規の漁業を試す者がたくさん出てきた。昨年からタコ漁も始まった。カスベ、サンマ、サメ漁なども改良したらずいぶん有望と思われる。

▼二月十九日

カレ網久しぶりで出漁した。古英丸は一〇日ぶりで来る。

▼二月二二日

新聞によれば、余市に漁夫の第一陣二〇〇余名が入ったとのこと、岩内ではスケソ網に鰊が一尾掛かったという。夜、社会教育活動写真（映画）が学校であるというので子どもらが行く。㊥からラジオをつけたから聞きに来てくれと通知がある。大阪、東京、名古屋放送局どれでも聞ける。世の中もずいぶん進歩したものだ。

▼二月二四日　小樽新聞によると、二二日探海丸が古平沖で鰊一尾とったとのこと、六年生で肥大しているという。めでたい大漁の兆しとして喜ぶべしだ。㊥へラジオを聞きに行ったが、店から奥の方から大勢の人であったが、どうしたことか故障したのか聞き取りにくく、途中で帰る。

▼二月二五日
網の照会をしたが、四日市方面の工場では注文で三月中頃までは約束済みという。原糸の値段が不安定で案内の値段より引けぬと言う。なかなか鼻息が荒い。よく検討の上仕入れを決めねばならぬ。七時頃から㊏へラジオを聞きに行く、明瞭によく聞こえる。講談、端唄、琵琶を聞いた。大勢の人が来ていたがみな感心して聞いている。

▼二月二六日
青空が見えるがまだ海が荒れているので、カレ網は出漁を見合わせている。汽船で漁夫が二百数十名ほどが来た。店へもアバリだの軍手を買いに来た。

▼二月二七日
天候も回復し春らしくなった。本州からの汽船が二隻入港して漁夫が上陸して来る。ナギがよいのでカレ網、スケソ網もみんな出漁した。

▼二月二八日
小樽通いの勇丸、共栄丸は今年の初航海なので、万国旗を揚げて荷揚げしている。カレ網は漁もあり値段もよいが、スケソ網は薄漁だという。

▼三月一日
祝聖会例会、一日増しに鰊場気分が高まってくる、馬車屋は漁夫の荷物を満載して通る。町中が来るべき鰊漁を期待している。古平もこの三月、四月の活気がもう少し続けばよいのだが。漁港が出来たら変わるだろう。

▼三月二日
漁夫が入り込んでから町の人通りも多くなった。町中も活気を呈して来た。店の方も二人ではまわり切れぬほど忙しくなった。店の方は九分どおり貸し売りだが、これもまた漁場の習慣で仕方ない。大漁を願うのみである。スケソ漁は新規に三、四隻増えたが余りかからないようだ。

▼三月三日
イワシ網の見本が来る。四月下旬から見本によって注文を受けつけることにする。節句で越中屋でおひなさんを飾るというので、トミ子は学校から帰ると見に行く。ボタモチなどを貰って帰って来る。

▼三月一〇日
鰊漁も切迫して町中が緊張している。畑方面からは鰊漁の間、浜の方へ移って来て刺網や歩方に入る人がいて、馬そりに家財道具などを積んで通る。明日あたり網おろし、一五日頃建込みとのこと。一〇年前から見れば一〇日ほども早くなったようだ。

▼三月一三日
今日は吉日ということで、どこも網おろし祝いの日だ。浜は大漁旗やら吹流しが立っていて景気よい。番屋からは騒ぎ声が聞こえてくる。

▼三月一四日
金魚売りの声、今日初めて聞く。何となくのどかで春らしくなった。子どもたちは金魚売りが来たというので喜んでいる。

▼三月一七日
型入れをする船が沖にたくさん出ていて浜は賑やかだ。刺網も支度に忙しい。カレ網はアカガレが大漁だったとか。

▼三月一八日
昨夜からにわかに吹雪きになり、朝になり風はおさまったが雪は止まない。この分だと鰊は遅れそうだ。昨夜、入船町の種田漁場で初鰊一尾獲れたという、めでたいことだ。

▼三月二〇日
発動機船をチャーターしてタラ釣りをするというので、綿糸類を買いに来た。川崎船だと二〇〇枚くらいだが、発動機船なので四〇〇枚は必要だと言う。漁業も一年ごとに機械化されてくる。枠引きも川崎船でやる者はなくなった。

▼三月二一日
水産試験場の予報では水温が高く、今年は鰊が早いなどと言っていたが、この寒さで水温も低くなったので、例年より遅いのではないか。浜では皆一日千秋の思いで鰊を待っているが、やはり二五、六日頃ではないか。

▼三月二二日
古平～余市間の運航をしている甲谷と小原の競争が激しく、客の奪い合いをしているとのこと。小原では桟橋を造ってそこから乗船できるようにしたとのこと、これは便利である。何事も競争は免れぬ。聞けば丸山岬の種田漁場では五〇箱ほどの初漁があったとのこと。

▼三月二三日

二一日夜、ローソク岩付近の三か統で初鰊があり、七、八箱から七、八〇箱あったという。一箱一〇～一八円という。ローソク岩は古平に近いから楽しみがある。先年までは古宇、岩内方面から獲れ始めたが、近頃は全く変わってしまった。

▼三月二四日

昨夜、群来村方面で漁があり、渡辺、小林、㊀で合計六〇箱ほど獲れたという。沢江方面の刺網でも二、三尾かかったという。にわかに浜には活気が出てきた。昼頃㊀から初鰊二尾貰う、本当の初物である。計ったら一尺五寸と一尺八寸、目方は二八五匁と二八七匁だった。どれも肥大した鰊でこの分なら今年も大漁だろう。浜に出て見ると発動機船が枠引きの準備をしている。

▼三月二六日

荒れ模様なので建網も刺網も揚げている。歌棄の先の雑倉が雪崩で倒れたが、幸い死傷者はいなかったという。夜になり吹雪はますます激しくなり寒中のようだ。浜では漁船を引き揚げている。

▼三月二八日

△の発動機船の船長が上陸していて時化になり、船に戻ろうと磯舟で本船へ向かう途中磯舟が転覆し、舟もろ共に岩にぶつけられて足を折ったという。午後、入船町岬方面で鰊模様があり、種田本家で二〇杯以上、⊼も二〇～三〇杯、その外も乗網中だとという。浜に出て見ると建て込みに出る船や刺網の船で大混雑、急に活気づいて浜は大騒ぎ、湾内では枠引きの発動機船があちこち走りまわっている。夕方、群来村では千石も獲ったという話しである。夜になると㋕浜では何百人も集まっている。その後、群来村方面では代り枠が行ったとのこと。イ、八、種金、野村、渡辺、その他一帯で漁があった。

▼三月二九日

雨にダシ風だが予想外の大漁で、海も陸も戦場のような騒ぎだ。沖では枠引きの発動機船が忙しく走りまわり、陸ではモッコしょいに刺網の鰊はずしで実に賑やかだ。雨は止んだが風が強く、荒れるのではないかと大急ぎで沖揚げ中だ。今日のひと漁で五千石は揚げたろう。こんなことは数十年来ないという。

（新聞によればこの日の水揚げは刺網一、五〇〇石、刺網六、〇〇〇石、計七、五〇〇石とある）

▼三月三〇日

今朝の漁況を聞くと、入船町岬方面一七、八杯、前浜三、四杯、刺網も掛かっている。今日までのところ入船町から美国郡境までの建網が大漁、歌棄山中の例年大漁の場所はまだ五、六杯といったところ、三時頃から風がでて波も立ってきて、買鰊の船が陸に着けずに困っているという。

本日までの漁況、

古平一万石、美国四千石
余市五千石、厚田三百石
岩宇、積丹　皆無

▼三月三一日

入船町　八、種金では今日も沖揚げ、三日間も沖上げが続くとはうらやましい大漁だ。中央通りは鰊を運搬したり、海水汲みなどの人たちで小樽の町中のような賑やかさだ。夕方から海がないできたので、時化後のひと漁があるかもしれないと、みんな勇んで出漁する。

▼四月一日

祝聖会例会日、鰊割き連中がたくさん通る。鰊場中は皆実によく稼ぐ。明け方に沖村、歌棄方面で漁あり、㋕七、八杯、上田二、三杯、昼頃から波が出て次第に高くなり、三時頃、松坂のホッツ船四人乗りが港町の木材会社の浜で転覆、三人は助かったが一人が死亡した。実に気の毒なことだ。

▼四月二日

昨日の荒れが一変して上天気になった。どこでも鰊つぶしや鰊割きで手間取りの人達は大忙しだ。富丸が来たが満員だ、毎日鰊出面が浜町だけでも数十人が来るという。八時頃、丸山岬から沖村一帯にかけて厚い群来があり、浜では勇ましい沖揚げの掛け声が響く。どこでも代り枠を持って行くというので大騒ぎ。どこも出面頼みに走りまわっている。三一日夜、美国、婦美、幌武意方面で四、〇〇〇石ほどかかったが、一日の時化で大半を投棄したという。

（続く）

町内の学校探訪

新地小学校

◆新地分教場新築

当初の計画は、丸山裾野の斜面を削って整地し校舎を建設する予定であったが、屋外運動場の余裕がなかったため、寄付を受けた土地のやや平地の所を校舎の敷地とし、斜面の整地したところを屋外運動場とすることにした。

これらの計画や設計の変更に日時を要し、八月六日一般競争入札にしたが落札者がなく、予定価格で請負人伊藤健吉と随意契約し、八月八日着工した。

旧校舎の材料を使用したので一部材料の補充や、仕様変更などもあり工費は一万五千余円となった。

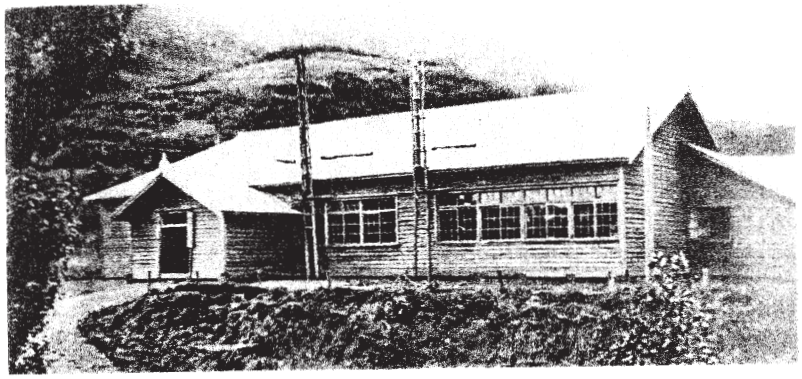
新地分教場は今まで第一、二学年の二学級編成であったが、新築後は第一学年から第四学年までの四学級編成にすることとし、工事内容は次ぎのようであった。

校舎木造平屋建て柾ぶき
普通教室　五教室　九九・八坪
職員室　一二・一坪
屋内運動場　四九・九坪
昇降口　二箇所　七・〇坪
付属教員住宅二室　八・二坪
小使室・物置など　一七・二坪
廊下　四八・一坪
便所　八・八坪
合計　二五一・一坪

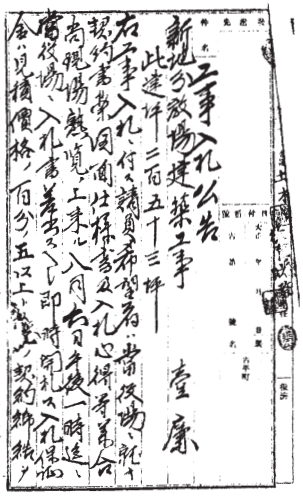
ようやく新校舎の完成を目前にして思いがけない事件が起きてしまった。大正一二年一一月一一日午前一〇時三〇分頃、学校近くの住宅から原因不明の※

資料で見る新地分教場

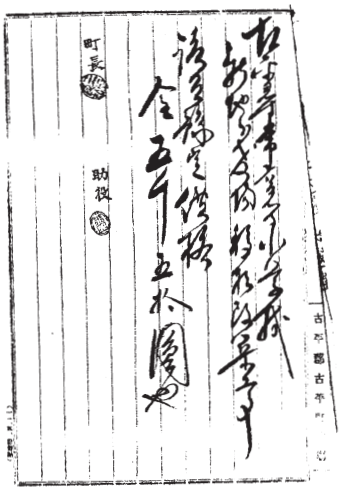
大正一二年に竣功し、昭和三一年に解体された新地分教場については、校舎正面からと、老朽校舎として新築前の廃屋を思わせるような写真の、僅か二枚が残されているだけである。



← 通学路から見た新地分教場（昭和一〇年頃の撮影）

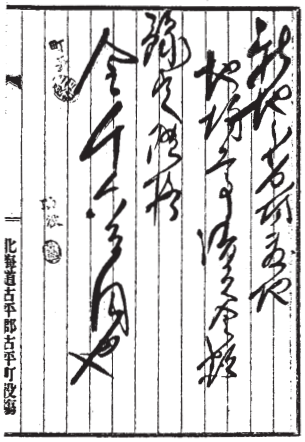


← 敷地の問題から設計変更が行なわれたが、いよいよ工事の入札公告が公示される

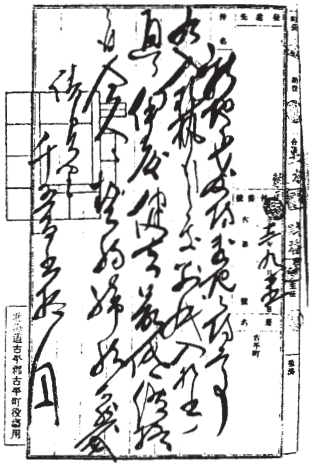


← 古平尋常高等小学校
新地分教場移転改築工事
請負予定価格　金五千五拾円也

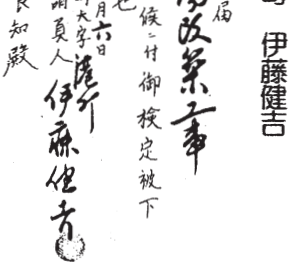
それ以前の焼失した校舎についてはもちろん無い。新地町には早くから写真館もあり、鰊漁などの外、町内の観光名所などの絵葉書まで作成されて残っているのに残念なことである。新地分教場の運動会や学芸会、卒業式などすべての行事は、本校である古平小学校で行なわれていたということもあるが、外にも学校についての資料は極めて少ないのが実情である。



← 新地分教場敷地地均工事請負金額
予低価格　金千六百円也



← 新地分教場敷地地均工事入札
右入札執行候処前議入札書の通り
伊藤健吉最低価格に付仝人と契約
締結可然候也
請負金　千五百五拾円



← 新地分教場改築工事竣功届
港町　伊藤健吉
竣功届
右工事本日竣功候に付御検定被下度此段御届候也
大正十二年十二月六日
古平町大字港町
請負人　伊藤健吉
古平町長三上良知殿

◇　◇　◇

※　出火があり、校舎は付属する教員住宅と共に類焼したのである。児童は校舎が竣功するまで本校へ通学することとなった。

一二月十六日、待望の新地分教場新築落成式が行なわれた。落成記念として新地町泉ユウからオルガンが寄贈され、後に北海道庁長官中川健蔵から、土地寄付者である藤澤勇蔵、高野常吉、高野名石蔵と共に褒状が授与された。

藤澤勇蔵は特に広大な土地を寄付したとして、その肖像写真が校内に掲示されていた。

また、落成式式場で古平町長三上良知から、古平町地方改良功績者及び善行者規程により、高野常吉外一九名に、表彰状と置時計一個が贈呈され、鴨居木特別教授所の尋常科訓導であった落合雄之烝が、永年勤続と職務勉励の努力によって表彰された。

新地分校の新築により、予定通り群来小学校が統合されることになったが、冬期や天候によっては児童にとって危険な通学路であった。古くからの崖に沿った狭い道路は強風にさらされたり、雪で道路がふさがれることもあった。

懸案であった古平・美国間の道路は、町費や道費によって改良や補修がされてきたが、新地分教場が新築されたことから学校への通学路の改修と共に、自動車道として新道が新地町の上に新設され、群来村と新地分教場の間に新たに切り通しが開削された。

※　新地町から美国町厚苫の、現在の国道へ通じるまでの全線開通はこの二年後の昭和三年のことであり、古平・美国間はこの道路の開通によって、馬車・馬そりや余別までの自動車が往来した。当時はこの道路を新道と言っていた。

— 続く —

初夏を迎えて

大澤文子

「いいなァ夏は…」

色紙をはりつめたような青一色の青空に思わずひとりごとを言う。北ぐにには漸く躍動感をくすぐるような夏がやってきたのだ。

飽くこともなく青空を見上げておれば、はや旅ごころのわきくる思いは誰しも否むことはできないであろう。

丘のなだりには夏を待ちかねたかの如く、爽やかに触れあう笹鳴りの音。

ふと窓越しに子らの声！　現実にもどりカーテンを引き窓外に目をやるとピッカピッカの一年生が、真新しいランドセルを背に軽やかなスキップをしながら駆けてゆく。二、三日前の入学式当日の緊張感とはほど遠く自信満々の愛らしい足どりがほほえましい。

「気をつけてネー」

声をかけると、

「ハーイ」

元気に大きな声をあげ、手にさげていた小袋をふりふりはや角をまがり走り去っていってしまった。

「いいなァ一年生は…」

その時ふと走馬灯の如くわが心をよぎるものは…。

ああ、あれはたしか大正十三年頃のこと。教職についていた父が、新潟市から佐渡の高等女学校へ転勤になった。その時姉は尋常小学校四年生、私は二年生になったばかり、受持ちの先生は小菅タマ先生だった。

佐渡ケ島は花ばたけの多い土地で、どこの家でも垣根越しに青紫のつゆ草があふれ咲き子供心にもそれは楽しかった。学校の帰りには友達と垣根越しに座り、「どの花ほしい？」なんて遊びながら帰途についたものだった。その頃の友達は皆元禄袖の着物を着ておさげ髪だった。姉と私は母手製のワンピースだったのを覚えている。

父はその頃まだ若かったので自転車に乗ることもはじめてらしかった。講義が終わり学校から帰って来ると、いつもとなり町まで自転車乗りの稽古に行くらしかった。がいつも怪我して大変！

「大変よ大変よ！　お父さんが…」

いつも母の叫び声に玄関まで飛び出してゆく姉妹だった。となり町からの父のおみやげはいつも『大福餅』だ。大福餅をねだる姉妹の声もまじりいつも大賑やかな日々だったが。

翌年の四月、大正十四年にはまたまたあの津軽海峡を渡り、札幌師範学校勤務となったのだ。姉は五年生、私は三年生、札幌師範学校付属小学校に編入したのだった。

新潟生まれの母は転勤のたびに、

「あー箪笥も何もいらないねー」と悲しく愚痴を言う。また冬になると輝（あかぎれ）に悩まされ、かわいそうに思った。

茶の間の柱によりかかり、軟膏を火箸の先につけて「あちちあちち」と顔をしかめながら治療している姿を見て、子供心にもかわいそうと思った。

札幌の新居は南大通り西十九丁目の一軒家。裏庭はかなり広く、土いじりの好きな父はよく種を求めて来ては手入れをしていた。土曜、日曜になると師範学校の学生さん達が見え賑やかだった。

私と姉は八畳間の隅の座り机で宿題や予習をしていたが、学生さん達が見えると賑やかで、勉強もそっちのけ一緒になって笑いさわぐのも常だった。

母も楽しそうに接待していたので、子供心にもその母の行動を見てホッとしたこともあった。その母の大好きな花はコスモスだった。

荒風に吹き倒れてもなお、陽にむかい花を咲かせる…、母はそんな強い女性が大好きだった。

父の大好きだった矢車草
母の大好きだったコスモスの花

いまそれぞれの花の種は、小庭の土におろすまでわが書斎の小箱の中で、「出番」を待っている。

泣き笑いの樺太漁場体験記

吉野慶一郎

局長室に行って見るとそこにはすでに専属の通訳が居り、二人は額を寄せて何か話し合っているので、さらに不安が増してきました。局長は通訳を経て、

「吉野サンに折り入って願いがあります。あなたの家にソ連では見られない立派なラジオがありますネ。私はとても気に入りました。できるなら私に売ってくれませんか？　勿論代金は支払います」

局長は傍で柔和な顔をしていました。突然の話で驚くと共に、こんなことだったのかと安堵の胸をなでおろしました。

このラジオは、終戦の少し前まで町内の電器店の中央にデンと陳列されていて、人目を引いた日本ビクター製の五球スーパーヘテロダインという、大型でデザインも性能も優れた当時としては贅沢な品で、私には手の届かない高嶺の花でしたが、電器店が閉店する時、店主の好意で思いがけなく安い価格で手に入った宝物でした。

終戦直後、ソ連軍は日本人のラジオを供出させましたが、その時は別な小型のラジオを差し出して、これは倉庫の地下に隠しておいたので無事でした。

その後、間もなくラジオは日本人のところへ戻ってきましたので、倉庫から持ってきて堂々と室内に置いて家族と楽しんでいました。何度かわが家に来た局長の目に止まったのも当然でしょう。そこで私は、

「今日本人は、ラジオが唯一の心の慰めとして楽しんでおります。引き揚げが決まるまで手放す気持ちにはなれません。この心情をご理解願います」

と丁重に断りました。すると、

「吉野サンは何時引き揚げるのですか」

これもまた意外な質問なので、

「私たち漁業者の帰国許可は、最高責任者である局長のあなたの権限ではありませんか」

と答えると、

「吉野サンは早く帰国したいのですか？　日本国内はいま、敗戦後の混乱と食糧不足で餓死者が出ていると聞いてますヨ」

などと、いかにも同情しているような口ぶりでした。そこで私もこの機に乗じて、

「あるいはその通りかと想像できますが、北海道には自分の老いた母と年若い弟妹が住んでいます。終戦後全く連絡がとれず生死も分からず心配し続けております。今はただ再会ができ、無事を喜び合える日の一日も早く来ることを祈っている毎日です。」

少し誇張して話したところ、

「よくわかります。もう少し辛抱してください」

と、幾分人間味のあるやさしい言葉になっていました。

翌日、通訳が車で迎えに来たので事務局に行くと局長が、

「昨日はいろいろと話を聞いて吉野サンの事情がよくわかりましたので、一日も早く日本へ帰国してもらうことにしました。私から帰国許可を差し上げますので、これを明日役場へ持参して、町長から正式の引き揚げ証明書を受け取って下さい。」と言われ、あまりにも突然の事態に動転し戸惑いました。

ひと呼吸して、

「ご親切に感謝しますが今は鰊場の最中です。経営主としての責任上、漁場終了まで延期していただきたい」

と遠慮すると、

「その心配は全く要りません。吉野漁場は野田漁業組合が継承することに話がまとまっていますから、どうぞ安心して帰国して下さい。」

何と手回しのよいのにはただ呆れ返るばかりです。そこで覚悟を決め、

「いろいろとご親切なお取 ⇦

＝古平と私＝

遠くても近い人

葛西庸三

過日、石狩のとある小料理店に寄った。壁に有名人の色紙がたくさん飾られていた。

その中の一枚に、

―近くても遠い人、遠くても近い人、それは心の絆から生まれる―

と書いていた。何度も読み返し、ああ、いい言葉だなあ、と思った。

確かに年に何度か会合で顔を合わせる身近な人でも、なかなか心の底から打ち解けて語り合えない人がいる。それは、自分の料簡の狭さからきていることは解るのだが、どうしようもない。

反面、遠くにいる人でも、いつも気になる人がいる。どうしているのかな、と妻と話し合う。

そうゆう人から突然電話がきたり、便りがあると嬉しい。心がふくよかになり楽しい。そこに確かな心の絆があるからだ。

「遠くても近い人」は、「遠くても近いところ」でもある。

そう考えると、古平は私にとって「遠くても近い人」がたくさんいる街であり、「遠くても忘れられない近い街」でもある。

短い三年間の生活ではあったが、歴史と伝統のある個性の街で暮らす人との、強烈で濃密な出会いがあった。

「絵は見て感じるもの」という拙文をのせていただいて直ぐ、渡辺嘉之さんから一字一句大変丁寧なお便りをいただいた。

―今でもあなたが「古平美協」のことや、会員の動向を気にかけていることに驚き、感激している―

という内容であった。私も妻も、しっかりした構成と独特な色彩の渡辺さんの作品は好きであった。今でも時々思い出しては妻と話し合っている。

渡辺さんのことで思い出すのは、確かＰＴＡの行事ではなかったか、と思うのだが。

リヤカーに食料を積んで、水源地(炊事遠足行った時のことだ。妻も一緒させてもらった。静かできれいな緑の中を流れる小川の側でほおばったおにぎりの味は、今でも忘れられない。

２０９号に書いた「少年野球の思い出」を、元古平小校長の滝沢繁さんに送ったらすぐお返事がきた。

―確かに古平には比類なき「三位一体」の力があり、それが全道・全国で活躍できた基礎であった―

と書かれてあった。

◇

古平の街と古平の人は、私と家族にとって、今でも「遠くて近い街、遠くて近い人」である。とても有難いことだと思っている。

これからもずっと心の中を生き続けていくことにまちがいない。

⇦り計らえには厚くお礼を申し上げます。それでは帰国させていただきます。」

と述べたものの、心の奥には深いわだかまりが残りました。

真に同情しての親切心によるものか、一刻も早くあのラジオが欲しいばかりに地位を利用しての計略か、迷う気持ちもありました。しかし、ここまできたら最早成り行きに任せるしかないと自分に言い聞かせました。

思えば一台のラジオにさえ、私の引き揚げ時期を左右するような運命を担っていたことに感謝し、畏敬の念すら覚えました。そして、最後にムザムザとソ連人に取り上げられる無念さは辛いものでした。引き揚げを手放しで喜び浮かれる気は起きませんでした。

―続く―

『方言』が生きている

古平ではだんだん耳にすることがなくなってきたが、土地に根づいた「方言」があり、動物や植物についてもそれぞれの地方の言葉が今も残っているものがある。

× × ×

春を告げる フキノトウ

フキノトウはフキの花の蕾がたくさん集まって葉に包まれて出てきたものである。フキはキクの仲間で、植物では珍しく雄花と雌花がそれぞれ別の雌雄異株である。香りが高く、そのほろ苦い味を好む人も多い。咳止めや健胃の効果がある漢方薬だが、中国では食べるという習慣は一般的にはないらしい。

その成分は分かっていないので、あまり多量に食べないほうがよさそうであるが、もっともそんなにたくさん食べられるものでもない。暖地の海岸などに自生するツワブキは葉の形がフキと似ているが、花は黄色で両性花、秋に開花する近縁の植物である。

フキは川沿いなどの少し湿り気のある場所や路傍などによく生えているが、雪国では春の雪解けを待ちかねたように真っ先に顔を出す。元来野生の植物であるが、葉柄（ようへい）が食用にされるので、栽培しているところもある。

山菜から作物に変化していく過程を示している植物というよう。東北、北海道などに生えているアキタブキは大型のフキで、これも栽培されているものがある。

自然の動植物などを元にして作った『自然暦』という暦があるが、「バッケの花が咲くと熊が出る」と新潟県のある地方で言い伝えがあるという。

古平でも新潟地方から移住して来た人が多いのか、フキノトウのことを「バッケ」とか「バッカイ」とか言っていた。バッケは方言である。

ツブ の名の由来

古平では「ツブ」のことを「ツンブ」と言っているように聞こえる。確かにそう言っていたしアクセントにも特徴があった。昔は都会へ行くと、田舎モノだといわれないようにつとめて標準語に近いことばで話そうとするが、モノの名前は土地によって違うので、たいていはその土地の名前で言う。

ツブという名の由来はいろいろあるが、形が円（つぶら）だからという説が有力である。

北海道では、エゾバイ科の仲間である巻貝をツブと言っているが、東北地方の一部では「タニシ」のこともツブと呼ぶところもあるらしい。アワビは海藻、ホタテガイは植物プランクトンを食べて生長するが、ツブは海藻だけでは飽き足らず、ときには小魚なども食べるほど貪欲。古平でも盛んな「ツブ篭漁」はこの習性を利用した漁法である。イカやスケソなどの餌を入れた篭を海底に沈め、餌の匂いにつられてはい上がってきたツブが、ストンと篭の中に落ちるという仕組みである。

北海道で最も漁獲漁の多いツブはヒメエゾボラで、焼いても鍋にしてもうまいが、通称「あぶら」を食べると船酔いに似た症状を起すことがある。それで「ネムリツブ」という。これより大型のエゾボラ（真ツブ）はアワビよりうまいと言う人もいる。ツブの仲間（属名）の「ネプチューン」という名はローマ神話に出てくる「海神」の名前である。

一期一会

瀧内優子

冬日さす唐松林を目に追へばきらめき光る風花の舞ひ

咲きて散る会ひて別れるならはしに玻璃のきしみの如き痛みよ

音もなくシンビジュームの花落ちぬ褪せる時の移ろひ見せて

黒きコーヒ匂ふ茶房に立寄りて別れを惜しみ惜しまれてをり

束の間の夕映えながら一隅を占めて裸木の梢はなやぐ

小雪降る宵のかなしみか外燈のひかりの下に佇みをれば

わが住む峡の夜の八時は人気なく街灯のみが寂しく照らす

とにかくに今日は暮れたり森閑を己のが鼓動を聞きつつ眠る

門柱のアーチに垂れたる薔薇のつる昨夜帽子にからみしはこれ

切口につゆ滲み出す韮の青にほへるものを汁に放ちぬ

編集雑記

▽先にもお知らせいたしましたように、三月をもって古平町史編さん室が閉鎖されることになりましたので、『せたかむい』については、愛読されている方々から背中を押され継続して発行することになり、それにともなって仕事場を自宅に移しました。

今までは資料やすべての用具が手近かにあり、それに慣れて仕事を進めていましたが、仕事場の環境がすっかり変わり、工場でいえば生産ラインが逆に古いものにとって替わったようなものです。自宅の整理もつかないままに編集・発行の方もすっかり遅れてしまい、その間の応接に少々汗をかき、ご要望に沿え得なかったことをお詫びいたします。

今後に備えて何とか大方の準備も整えましたので、以後、順調に継続できそうです。こうゆう仕事は軌道にのらないとなかなか進捗しませんので、準備期間に時間を要したことも致し方ないかなと、自問自答しております。

それと折角集めた資料類の整理ですが、これらは町内の方々からのご好意による貴重なものですので、今後の活用を考え、利用しやすいような状態で保管しなければなりません。しかし保管場所のこともあり、狭い場所にいかに要領よく整理整頓して格納するか、これもなかなかの難問です。時折訪れる方もおり、利用者の便宜を図ることも大事な自治体としてのサービスです。

▽『せたかむい』の紙面で、郷土色にあふれ、いつもさりげなく感動を与えてくださる葛西先生からのひとことです。「古平町の広報はとても見やすくて分りやすい。私のまちのは、文字が小さく詰まっていて読みにくい」とのことです。仕事をしていて何か助言がいただけると、とてもそれはありがたいことであり励みでもあります。同じ町発行の印刷物ですので大変参考になります。

▽今年の二月は陽春？　三月は寒中？　と暦を取り違えたような天候でしたが、四月もなにか花冷えのようで、天候異変を連想させる天気模様でした。連休後からの挽回に期待したいところです。

俳句

雑詠〔五月号〕

主宰　水見壽男

新しき年の風音波の音　越野清治

対岸の連峰燃ゆる初日の出

行年の何時に変らず海は海

頂上の凍てて積丹岳ありぬ

磯波を沖に追ひ遣る虎落笛

侘助の一輪寂とお茶席に　山口悦子

笑初笑ひすぎたる涙かな

きらきらと七色とばす軒氷柱

九十の母が読み手の歌歌留多

元旦や穏やかなりし鳥の声　越野敏雄

初漁を観音岩に見送らる

初雀手摺に声を残し去る

はずし娘の手鉤が捌く鰹かな

朝まだき降りつむ雪の粛粛と　高橋重子

厚き雲分けて輝く初日の出

初夢の正夢となり午後の友

初句会生きる証の一句欲し

北の地の空真つ青や年明ける　外山俊久

雪折の一位の木より匂ひ立つ

寒紅をさしたる乙女凛として

弓初的真ん中を射抜きたる　堀典子

船音を吹雪が奪ふ海となる

風花のうたかたのごと消えにけり

曇天を捲つて見れば春隣

元朝やまづ海神に漁願ふ　本間寿昭

横に降る北海道の牡丹雪

寒月や風粛粛と哭く岬

活〆の鮃積みたる初荷かな

夜の雪無声映画のやうに降る　渡辺嘉之

寒月のそこだけ雲の割れてをり

寒月の鋭き風に砕けたり

初凪や沖一帆の影揺るる　室谷弘子

初凪や大漁旗の揺れ止まず

古稀の夫しきり気にする初鏡

蛇行せし断崖の道大氷柱

怒濤

古平俳句会

【二二】
―五月号―

春の海数多の思ひ吸ひ込みぬ　越野清治

一湾に落とす山影春の影

積丹の岳より颪す雪解風　斉藤波留

雪解風石狩湾をさざめかす

踏まれてものの芽斜め立ちてをり　山口悦子

つばくらめ古巣いづくぞ泣ひて飛ぶ

旅立ちて白い祇園の濡れ燕　越野敏雄

ゆつくりと爪切り落とす暖かさ

早春の海辺に潮の香を掬ふ　大和田絵伊

春寒や日本海荒れ止まざりし

かけがえのない家族あり春の土　高橋重子

黄水仙夫よりも年重ねたり

北国の山河が光る初景色　外山俊久

雪の庭一つぽつりと寒椿

樅の芽の強さをもらふ元気かな　堀　典子

しづやかな霞の中の空の色

ものの芽の膨らむ音の真闇かな　本間寿昭

凪待ちの船頭の顔長閑なり

三月の風はどこにも来て謳ふ　渡辺嘉之

淡雪の文字の滲みし旅日記

春霞晴れて岬の波光る　室谷弘子

還暦を祝ふが如く春の雪

浜風や行き場失ふ浪の花　仲谷比呂古

横綱のピンクの袴蕗の薹

短歌

古平岬短歌会

かたはらに返事なききみねむりゐぬ八十年の疲れし顔に　池田テル

窓辺にて冬の日差しを受け止めてカイワレ大根すくすく育つ　金子寿子

暖冬の日向のさくら早芽吹く蕾ふくらみ咲くときを待つ　坂本信子

炉端に乾すこの朝採れし銀杏早春の匂ひの部屋へやに満つ　鈴木時子

雛祭り古里の人形思ひ出しせめて楽しむ今宵一とき　田中香苗

しめやかに「千の風」流るる斎場に笑まふいとこの遺影に額づく　丹後初江

（七つの子）うたひ雪道一歩づつバス停留所まで今日も歩みぬ　東美知

沖合に鰊群来しか朝市に積まれしその数一万箱なり　堀典子

俳句

古平俳句会

追い駆けて追い駆けられて初燕　越野清治

灯台を借景にして海苔掻女　斉藤波留

この辺と思ひし処芽芍薬　山口悦子

春の雷漁火遠くありにけり　越野敏雄

荒るる日々冴返る日々凪を待つ　大和田絵伊

月朧潮風ゆたに岩を打つ　高橋重子

北海の墨絵の山河鶴が舞ふ　外山俊久

研する声を吸ひ込む木の芽山　堀典子

一湾を鞣す入日や雛飾る　本間寿昭

強東風や海図を持たぬ船に乗り　渡辺嘉之

墨絵めく春雪木立塗り替へる　室谷弘子

ほろ苦き香り近づき蕗の薹　仲谷比呂古

古平町史年表

昭和31年（1956）　～続く

▲北海道文化財専門委員の一行が古平町の文化財調査のため来町する。古平中学校を会場に沖揚げ音頭・豊年踊り・越後盆踊りなどが披露される

▲北海道開発局長池田一男一行が、国費による工事現場を視察のため来町する

▲琴平神社の招魂祭宵宮祭に自衛隊音楽隊50余名が来町、街頭行進を行なう。招魂祭本祭が雨のため古平小学校運動場で行なわれ、終わって音楽隊の演奏会が行なわれる

▲古平郵便局の新局舎が港町３３番地に落成、移転する

▲教育委員会法が改正になり、教育委員は町長の任命制となる（山口忠治・橋本善二・幾井重久・高野常雄・宇須井昇）

▲観音滝祭りが行なわれたが、観音像を寺院などに移設するところが多くなった

▲新地分校の廃材の払下げを受け、西部方面の5町内会の拠出金により新地町に港会館を建設する

▲古平小学校新地分校が新築され、落成式の後全児童が校下を旗行列する。規模としては全道一の分校となる

▲古平町が財政再建団体の指定を受ける

▲都市計画区画整理により、西部地区の道路の名称が新たに決まる

▲古平漁港拡整備計画第１期工事（昭和 33 年完了）のうち東防波堤８５メートル（旧灯台より延長分）が完成する。

▲古平町文化財専門委員会が設置される

▲古平町教育委員会が「古平町教育の概況」を刊行する

▲農家の副業として養鶏を奨励し古平町育雛場を建設し、古平農協川島指導員が育雛業務を担当する

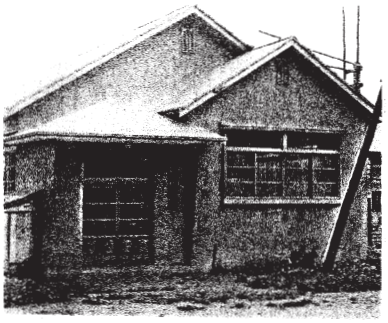
▲廻り渕隠落への送電工事が完了する（稲倉石鉱山への送電線は早くからあったが、途中の廻り渕隠落は無灯火であった）

▲入船町斉藤水産加工場から出火して、隣接の最上加工場を半焼して鎮火する

▲古平でスケソ大漁、岩内などが不漁のため高値で東京方面へ鮮魚で出荷される。この年の漁獲量１１，４９３トン（刺網 69 隻・延縄 15 隻）、キロ単価１７円

→ 観音滝に安置されていた観音像

← 岩を削った中に安置



→ 港会館

→ スケソに埋まる岸壁

→ 浜での食事のひとときき